

平成 28 年度 第 45 回  
**北海道・東北地区教員研修会**

期日 平成 28 年 10 月 14 日(金)

会場 桜の聖母学院小学校



日本私立小学校連合会  
 〒102-0073  
 東京都千代田区九段北 4-2-25  
 私学会館別館 6 階  
 電話 03 (3261) 2934

研修会当日のスケジュール

- 8:30～8:45 受付
- 8:50～9:30 全体会
- 9:40～10:20 研究授業 (公開)
- 10:20～10:30 帰りの会・下校指導 (公開)
- 10:40～12:20 部会①
- 12:20～13:30 昼食
- 13:30～17:00 部会② (部会毎に閉会、解散)

東北地区の理事の先生方、各教科の指導助言の先生方、各校からの先生方。すべて合わせると、今回は百二十名の参加とい

のは何よりでした。  
 日本私立小学校連合会の小泉清裕会長をはじめ、北海道・

研修会の前週は、雨の日が続きました。会場校として詰めめの準備をしつつ、最後の気掛かりとなっていたのは、天気です。それも杞憂に終わり、当日は雲一つない晴天。爽やかな青空の下、ここ福島、そして本校にて、四十五回目となる当研修会を開催できた

『踏襲』と『改変』

桜の聖母学院小学校  
 副校長 武藤浩之

うことになり  
 ます。遠路に  
 も関わらず、  
 福山暁の星小  
 学校(広島・  
 西日本地区)  
 からもお一

人、国語部会に参加され、会場校としましては嬉しい限りでした。  
 当日のスケジュールは左上の通りです。基本的には従来の流れを踏襲



しながらも、変えたことが一つあります。全体会です。私の知る限りでは、少なくとも過去十年以上、昼食後に行なわれていました。それを朝の時間に移動したのは、全体会Ⅱ開会式という位置付けをしたいと考えたからです。

その全体会では、小泉清裕・日私小連会長から頂戴したお言葉をもとに、私学人としての自覚と責任を参加者全員で再確認ならびに共有しました。こうした前提のもとで研究授業と部会を行なったことは、各教科のテーマだけでなく、それらを包含している大テーマ『私学ならではの小学校教育の展開』に対する自覚と責任を深めることにもつながりました。

研究授業は六教科。一年生(国語)、二年生(算数)、三年生(英語)、四年生(体育)、五年生(音楽)、六年生(社会)です。単元や授業、加えて部会の内容については各教科の部長が後述しますので、ここでは触れません。唯一取り上げるとすれば、それは指導案です。他校と同様本校でも、会場校の最も重要な準備として校内研究に取り組んできました。簡単に披瀝しますと、三年を区切り

に計六年、前半は「基礎・基本の習得と活用」、後半は「教科の特性に基づいた授業の展開」をテーマに掲げ全教員が授業研究を行ないました。

本研修会における各教科のテーマと校内研修のそれとの関連をどう図っていくか。これもまた、各校が共通して思案するところでしょう。本校の場合、如何なるテーマにも対応できるものとして「基礎・基本」教科の特性」を柱に据えました。今後何かの折に、その指導案が役立つことがあれば幸いです。

紙幅が尽きてきました。最後に表題について触れます。今回、会場校となるに当たり、幾つか『改変』したことがあります。例えば、前述したように全体会です。指導案(要項)の記述を増やすため、要項も B5 判から A4 判にサイズアップしました。

約半世紀にわたり、先輩の先生方が築き上げてこられたこの研修会。価値あるものの『踏襲』と、明確な意図による『改変』を通して、更に前進することを切に願ひ、本稿の結びとします。

## 国語部会

言葉で表現する力を  
育てるために

渡邊 俊明 (聖ウルスラ学院英智)

国語部会は、「言葉で表現する力を育てるために」を研究テーマとし



て、宮城教育大学教職大学院名誉教授の相澤秀夫先生を指導助言者にお迎えして研修を行いました。

午前中は、会場校からの研究授業を通しての検討会、午後からは相澤先生による模擬授業を中心とした講話をいただきました。

午前中に行われた研究授業では、会場校である桜の聖母学院小学校の中津真貴子先生が、一年生の教科書教材である「くじらぐも」で授業をしてくださいました。授業前には子どもたちが元気に早口言葉の音読を行うなど、日頃の音読指導の成果がうかがえる学級でした。

発表のように音声で表現することに加え、文字として書いて表現したり、気持ちが表れるように音読したりすることも、国語部会の研究テーマである「言葉で表現する力」を育むであることから、中津先生は今回の単元で、『場面の様子を想像し、その様子が表れるように読むこと』を重点目標にして指導を進めてくれました。前時までに、場面に合った場所で音読をさせたり、動作化を取り入れた

りしながら授業を進めてこられました。

本時では、場面の様子を絵や叙述をもとに想像を膨らませ、自分が考えた会話を付け加える授業を展開されていました。中津先生は挿絵を拡大し立体化したものを掲示したり、繰り返し音読をさせたりしながら一年生らしい豊かな発想を存分に引き出していました。授業の中で、子どもたちがワークシートに書き込んだ内容についての机間指導に、指導助言の相澤先生も加わってください、机間指導を通しての意図的指名について分かりやすく参観者にご指導くださいました。

その後の授業検討会でも授業中の指名順序や、音読の取り入れ方などについて活発な意見交換がなされました、相澤先生からは、書けない子への支援の仕方や、低学年の音読を幼く扱わずにはいけないか、また、授業中の発表とは、価値ある学びをよりよく共有させていく手段であることなどを教えていただきました。

午後からの研修会では、音読を多く取り入れることの意義や、しっかりととした読みのできるクラスを作っていく声かけの仕方について、相澤

先生のご指導がありました。また、事前アンケートで各校から出た質問についていねいに解説していただきました。

国語部員を児童に見立てての模擬授業では、「くじらぐも」、「ごんぎつね」を使って、想像力を膨らませて考えたことを、文章で表現する授業をしていたいただきました。その中で、教師が意図的指名をしていくことで、児童に多くの友達の考え方に触れさせ、それがさらに読みを深めさせていくことを、実践を通して学ぶことができました。

今回の研修会では、より具体的な指導方法を多く学び合うことができ、大変意義深いものになりました。これからも子どもたちの国語の力をよりよく育んでいける、今回の学びを生かしていきたいと思えます。



## 社会科部会

自ら課題を見つけ追究する  
力を育てるために

山口美由紀（会津若松ザベリオ学園）

社会科部会では、今年度も北海道教育大学釧路校準教授の内山隆先生を指導助言者としてお迎えして、研修会を行いました。

午前中は会場校からの研究授業、授業を通しての検討会、午後からは各校からの実践報告の後に内山先生からの講話をいただきました。

午前中に行われた研究授業は、会場校である桜の聖母学院小学校の山内健太郎先生が、六年生の「明治の国作りを進めた人々」という単元から授業をしてくださいました。

本時は、提示された資料をもとに江戸時代末期と明治時代初期の日本橋近くの様子を比較するという内容でした。

確かに指示することで授業にテンポが生まれ、子ども達の活動も活発になって学習意欲が沸いてくる様子を感じられました。たった二十年しか変わらない二枚の絵なのにその変化は劇的で、その変化を子ども達はしっかりとらえていました。

授業後の検討会では、内山先生より時代の歴史の長さのとらえさせ方、時間軸のとらえさせ方として、変化をどう感じ取ったか（どう思っ



なげていく事ができる。どこにしておき、何を学ばせるかが大切だというお話をいただきました。

午後の研修は、始めに「効果的な資料活用をした実践」というテーマで各校での取り組みの実践報告を行いました。「わたしたちのまち みんなのまち」「はたらく人と私たちが報告され、そのひとつひとつに内山先生がコメントをくださいました。さらに、資料提示の工夫として、

①具体性がある。②実感。体験できる。③どの子も参加できる。④意外性があると追究意欲が生まれる。⑤子どもの考えを資料にして、対話的な学び、深い学びにつなげる。ポイントを教えてくださいました。

また、各学年に分かれての意見交換や各校での取り組みの相違点や工夫点を分かち合うことができました。

最後に内山先生から次期学習指導要領を見据えた教科指導のポイントについて講話をいただきました。今後の教科指導において重視しなければいけないポイントとして、①個別の知識や技能（何を知って、何がで

きるか）②思考力・判断力・表現力（知っていること、できることをどう使うか）③学びに向かう力・人間性）どのように社会、世界と関わりよりよい人生を送るか）の三つのポイントを挙げてわかりやすくご指導いただきました。

教科指導において重視しなければいけないポイントをしっかり認識することができ、充実した研修会でした。

## 算数部会

### 考える力・表現する力を つける授業

原田 聖士（桜の聖母学院）

平成二十八年度の北海道・東北地区私立小学校研修会は、本校（福島県福島市の桜の聖母学院小学校）を会場校として行われました。算数部会のテーマは『考える力・表現する力をつける授業（表現する力に重点を置いて）』です。今年度は、前国立学園小学校長の守屋義彦先生を指

導助言者としてお迎えしました。午前は、私が授業者として、第二学年の「かけ算」の授業を行いました。午後は、テーマに沿って各校が取り組んだ実践レポートの発表と指導助言者からの講話でした。

### （一）午前の研究授業・研究協議

研究授業は、かけ算の「同数累加」を理解させ、類似問題で適用することをねらいにしました。そこで、



教科書の内容「 $6 \times 4$ 」に加え、乗数を増やした「 $6 \times 5$ 」や「 $6 \times 7$ 」の問題も指導し、規則性を見出せるような展開にしました。また、被乗数が9を超える問題にも取り組み、かけ算には、同数累加が適応できることを理解させるようにしました。

授業後の研究協議では、主に次の三点が話題になりました。

①表現する力（説明する力）の育成  
私は、普段の授業の中で、一人の説明を他の児童に再度説明させたり、繰り返したりするようにしています。それを普段から実践していることは、表現する力の育成につながる、とても良い事であると守屋先生からお話をいただきました。

②タイトルやまとめの扱い  
私は、授業の初めに「かけ算」とタイトルを板書していましたが、それは児童の思考を止めてしまうこと。まとめについては、指導者の言葉ではなく、児童の言葉でまとめをせず問題に適用させるのみでよいということ。

この二点のご指摘をいただきました。

### ③ 拡散的集中力

守屋先生は先生方に「拡散的集中力を身に付けてほしい」とおっしゃいました。「拡散的集中力」とは児童の眩きをしかりと察知し、その中でも大切なものを、そうでないものを取捨選択する力です。算数の授業だけでなく、他教科の学習指導にも生かしていく必要があると感じました。

### (二) 午後のレポート発表と講話

各校のレポート発表の中でも特に話題になったことは、「算数日記の必要性」についてです。七校中二校が算数日記を実践していて、「自分の考えを客観的に見ることができると」という利点を述べていました。しかし、「書くこと」が嫌いな児童にとつては、辛いことではないかという意見もありました。私は、算数日記を書くよりも適用問題を解く方が理解を確認するために有効だと思います。

守屋先生は、講話の中で、各校のレポートについて細かくご指導され、また、「表現する力」について、守屋先生の考えを実践と結び付けて

お話ししてくださいました。その中でも特に印象に残ったことは、児童が自分の考えに自信を持ち、間違いを怖がらないように学習指導をすることが必要であるということです。短い時間ではありましたが、普段の授業や学級経営について、改めて考えさせられる講話でした。

## 音楽部会

### 生き生きと表現活動をする 児童を育てよう

齋藤 朋枝（聖ドミニコ学院）

音楽科研究主題「生き生きと表現活動をする児童を育てよう」のもと、指導助言者でもある福島学院大学の伊藤俊彦先生が、「曲想を生かして合奏しよう（教材 キリマンジャロ）」を題材に、第五学年の公開授業を行いました。

午前中に行われた授業の導入では、キリマンジャロについて、アフリカ大陸最高峰の山、東西八十キロにも及ぶ複合火山であると説明があ

りました。また、楽曲全体の雰囲気に合わせて伊藤先生オリジナルの歌詞により、旋律の特徴でもある力強さ、雄大さが自然とイメージしやすくなり、子ども達の演奏が生き生きと輝いていったように感じます。

「スタックカートがついているからスタックカートで演奏しよう」ではなく、どうしてそこにスタックカートがあるのか子ども達自身が主体的に想像し、それを演奏に生かして表現活動できるように、教師は手立てを工夫していかなければならないと考えさせられました。曲想は、楽曲をしつかりアナリーゼし、音楽を形づくっている要素を読み解くことが勿論大切であるが、一見、音楽とは関係のない事柄からアプローチし、楽曲のもつイメージを深めることで、子ども達を「その気」にさせ、意欲的に音楽表現できるようにしていく、私達教師の役割がとても大きいことを、この授業から学ぶことができました。また、最終的に演奏を仕上げるこ

が目的ではなく、子ども達の



考えた曲想を自由に引き出し、それを認め、教師は様々な手立てで、更に想像力を高めてあげること。この積み重ねによって、感性は育まれていくという話に、改めて音楽の教育的意義を痛感しました。

午後の研修は、リズム表現、手話ソング、リコーダー、手作り楽器、沢山の音楽表現を、ユーモア溢れる伊藤先生のご指導により、音楽のお

もしろさの原点を存分に味わいながら、テンポ良く進んでいきました。

特に、手作り楽器「カズー」は、大変興味深いものでした。クリアファイルシートや、ポリエチレン袋、テープ等、身近なもので簡単に作る事ができ、一度吹き方のコツをつかめば、自在に音程をとることが可能です。私達も、伴奏に合わせて、「聖者が町にやってくる」と「グッドナイトレディース」のそれぞれの旋律をカズーで重ねて演奏し、即興部分を加え、さながらセッションの様な雰囲気味わうことが出来ました。「リコーダーが苦手な子でも、生き生きと活動する」というのが納得の、いつまでも吹き続けていたくなる、魅力的な楽器と出会い、授業でもぜひ取り入れたいと思いました。

公開授業では子ども達の振り返りカードを全員分読み上げられ、また、研修会では私達教師にも、あたたかく気配り、心配りを下さった伊藤先生の姿勢に、一人ひとりの思い、考えを大切にするという、教師の使命を改めて学べたことは、宝物となりました。子ども達の音楽的技能的成長に寄り添いながら、心から音楽を

楽しむ豊かな感受性を育てていけるような取り組みを、今後目指していきたいです。この研修を糧に、一層研鑽を積んでいこうと、思いを新たにする事ができました。

## 保健体育部会

### 運動の楽しさを

### 味わわせる体育指導 く体づくり運動を通して

細 瀧 元 (仙台白百合学園)

「体づくり運動」は、様々な運動および身体活動の源となる要素を多く獲得することが期待できる重要なカテゴリーである。

桜の聖母学院小学校の湯川教諭と奥山教諭とのチームティーチングで、四年生を対象とした授業が行われた。今回は「コーディネーショントレーニング」「リズムなわとび」「ラダートレーニング」の三つを取り上げ、基礎体力の向上と、運動感覚をいかに身に付けさせるかという点に

主眼を置き授業を構成された。指導助言者には昨年に引き続き、福島大学トラッククラブコーチの菊田明博先生をお招きした。

湯川教諭は、全クラスの体育授業を担当している。迅速な整列や集合、気持ち良いあいさつなどは、日ごろの学級経営や授業経営で培われてきたものだということを感じた。

湯川教諭は、新一年生の運動能力が明らかに低下してきていることを危惧し、様々な視点から総合的な運動能力を高めたいと考えておられた。

コーディネーショントレーニングは、昨年の研修会で指導助言者の菊田先生からも多数ご紹介いただいたが、それらをアレンジしたもので、新しく考案したステップを取り入れ、改めて、いくらかでもバリエーションが増やせる教材であること認識した。リズムなわとびでは、アップテンポの曲に合わせて児童が考えた様々なステップを組み合

わせ、難なく軽快に跳び続ける子供たちの姿が印象的だった。ラダートレーニング導入のきっかけは東日本大震災。当時の福島市では室内での運動を余儀なくされ、クラブ活動のみで行っていたラダートレーニングを授業でも取り上げることになったそう。

研究討議会では菊田先生からコーディネーショントレーニングを行う



際の留意点として、①短い時間でやり返し行う。②たくさん種類を行う。③繰え、昨年もご指導いただいた「できないことも楽しめるように！」という点も加味することを挙げられていた。筋と神経系の協応を目指したトレーニングなので、しっかりと脳にストレスを与えてやることの要点と重要性を、本時の授業内容に合わせてご説明いただいた。

午後は「なわとびを活用したコイデイナーショントレーニング」というテーマの実技研修を菊田先生からご指導いただいた。いくつか内容を挙げると、長座から体を浮かせ、床と体の隙間で縄を回す跳び方や、あえて一回旋三跳躍や四跳躍をやらせてみることで、スキップで前方に進みながら後ろ回しとびをするなどを紹介していただいた。できる動きに少し変化を加えることで、難度や楽しみ方が変わることを感じてきた。最後にダブルダッチの回し方、跳び方を一通り練習し、各校でもぜひ挑戦してみようということになった。

の運動器検診は内科校医も手探りの状態で、特に「体が固い」状態の治療勧告は対応に差があった。検診時の配慮として、校医の了承を得て「女子児童は下着の着用可」とした学校が複数あった。他の検診時の工夫や治療勧告の方法など、多くの情報が交換され、学び多い場となった。

## 英語部会

### Thinking across the Curriculum

木村侑香子(聖ウルスラ学院英智)

英語部会では、昨年度に引き続き、「Thinking across the Curriculum」というテーマのもと、教科横断型の教材研究の在り方についての研修を、昭和女子大学附属昭和小学校校長の小泉清裕先生を指導助言者としてお迎えして行った。午前中は小泉先生による公開授業、教科横断型についてのワークショップ、午後は同テーマの下、各学校持ち寄りの実践

報告会を行った。

小泉先生による公開授業は、「色であそぶ」をテーマに、会場校である桜の聖母学院小学校の三年一組の児童を対象に行われた。同クラスの英語担当である野崎先生と事前に打ち合わせを重ねてきたという。既習事項をうまく活用しながら、色の持つ特性や、数字の規則性を活かし、

た。例えば、導入の部分では、既習事項である数字を使ったリズムゲームが行われた。挨拶の際は緊張の面持ちだった児童も、小泉先生の、既習事項を応用したテンポのよい英語での問いかけに、夢中になって英語で答えており、瞬時に英語の世界に引き込まれていた。その後も、数字とダブルレインボーの色の規則性を活用した「虹の色とその順序」、補



色のトリックを用いて色の不思議に迫る、「ハートの色の変化」、複数の色で塗られたブンブンごまを回して、色調の変化を予測する、「ブンブンごまの色の変化」の三つのアクティビティーが行われた。どのアクティビティーも、子どもたちの知的探究心を刺激することで色の不思議に迫り、自然に子どもに英語を使わせており、細部まで工夫が凝らされていた。更に特筆すべきは、小泉先生が、心地よい緊張感のあるメリハリのある空気感を作り出しながら、児童をアクティ

ビティーに引き込んでいたことである。同じ単語やフレーズを、内容や形を変えて、繰り返し使っていくことで、いつの間にか大量のインプットが行われ、自然に児童の口から英語が飛び出していく様子は、見事であった。また、教材提示や切り替えのタイミング等、字ぶところが多く、非常に有意義な時間となった。

その後に行われたワークショップでは、教科横断型の授業の理論と具体的な手法を、さまざまに教えていただいた。ドリルやリビートで聞き慣れない単語を無理矢理発話させるのではなく、内容のある子どもにとって面白いやり取りの中で、自然に児童が英語を話したくなる状況を作ることの大切さとその具体的な手法を教えていただいた。

実践報告会では、参加各校からの実践報告が行われた。英語でのディベート大会（郡山ザベリオ学園小学校）、漢字の画数を用いた数字のアクティビティ（桜の聖母学院小学校）、算数を英語で行う取り組み（仙台百百合学園小学校）、留学生向けのワークショップを児童に作らせる取り組み（聖ウルスラ学院英智小・

中学校）、日常的な英語科での取り組みについて（盛岡百百合学園小学校、聖ドミニコ学院小学校）など、各校の特色に合わせた教科横断型の英語の取り組みについての興味深い実践報告が行われた。

教科横断型の教材研究の在り方について、終日活発な意見交換が行われ、非常に学びの多い会となった。

## 図画工作部会

### 本物との出会い

上山 史記（郡山ザベリオ学園）

図画工作科研修会が、夏季研修会として再開されてから今年度で七回目となりました。毎年、夏の暑い時期に各校の代表が集まり、より良い授業の実践のため研修に励んできました。昨年度までは夏季休業中の研修会だった為、授業の様子を見る事はできませんでした。しかし、今回は会場校のご協力により、夏休み中に児童が登校し、実際に授業の様子

を参観し研修を行うことができました。

今年度の図工部会の研究主題は「本物との出会い」です。「本物」という言葉の捉え方によってさまざまな実践が可能な広がりのある主題です。今回の授業者である桜の聖母学院の奥山先生は、「本物との出会い」をテーマとして、美術作品への関心を高めるためにアートカードを活用した研究授業を行いました。福島県立美術館が収蔵する数多くの作品をアートカードに印刷して、そのカードを使った鑑賞の授業を行いました。いくつものカードの中から類似性や共通性を見つかったり、そこに描かれているモチーフの空気を感じたりしながら作品を深く味わいました。更にその後、児童は美術館に移動をして、授業でアートカードと目にしていた作品の本物と出会います。授業で使用したはがきサイズの印刷物ではなく、一つ一つ大きさや発色の違う実際の作品を目の当たりにして、目をきらきらと輝かせながら自分のお気に入りの作品を鑑賞する児童の姿が大変印象に残りました。

した。

午後は、午前中に行われた授業の事後検討会と共に、研究主題を元に行った各校の授業の実践報告を行いました。図画工作科では活動の中で多くの本物と出会います。授業で取り扱う描画材であったり表現技法であったり、あるいはモチーフとして使用している花や生き物など自然のものなど様々です。教師はそれら「本物」をどのように子ども達と出会わせ授業の中で活かす事ができるか、「本物との出会い」をどのように捉え授業を行ったのか、授業を通して児童にどのような学びがあったのかなど各校の実践について報告し、協議しました。

研究授業や事後研究会での活発な意見交換などを通して多くの学びを得た研修会となりました。



### 学校紹介

強く、たくましい子ども

桜の聖母学院小学校

教頭 中 津 真貴子

本校は、間もなく創立七〇周年を迎えます。一九三二年に五人のカナダ人のシスターが来日し、初めに幼稚園、次いで一九四六年に小学校を設立しました。その後、中学校、高等学校、短期大学を開校、開学。総合学院として現在に至っています。しかし、六年前に起きた東日本大震災により、幼稚園が半壊。対応策として、小学校の一階を改装し、二年半、幼稚園児と小学校の児童が同居する形をとりました。また、五年生は短大の一棟を借用し、本館と行き来するという毎日を通りました。



震災後は「よく学び、よく考える子ども」を教育重点目標にしました。教育環境の整備という状況下において、基礎学力を低下させることなく、維持、更には向上させていくためです。具体的には、毎週の漢字、計算テストを主としたゴールイメーシ(到達目標)に継続して取り組み、

- ・よく学び、よく考える子ども
- ・強く、たくましい子ども
- ・自分と他の人を大切にする子ども
- ・世界のために働く子ども

だけではありません。小学校の特別教室棟、体育館、プールの新築、グラウンドの整地と、教育環境の整備期間に二年半を要しました。ところで本校では、「誠実」を校训としつつ、次の四つの教育目標を掲げています。

この目標に直結する本校の行事があります。「登山合宿訓練」です。心身の鍛錬を目標に、四年生は一泊二日、五、六年生は二泊三日で実施しています。五、六年生の「登山合宿訓練」は、平成二九年度で第三〇回を迎える言わば本校の伝統行事でもあります。この合宿訓練では、六年生が班長を務め、登山だけではなく、規律ある



基礎基本の習得に努めました。教育環境が整えられ、基礎学力も着実に定着してきたことにより、今年度から教育重点目標を「強く、たくましい子ども」に移行しました。これは勿論、身体だけでなく、精神面も含まれた目標です。



生活の実践を目指して様々な活動を行なっています。その意図するものとして、願いとして、第一回から指導にあたっている体育科の教員は、次のように語っています。今後も、よき伝統を受け継ぎつつ、教職員が一丸となり、常に新たな挑戦を思っています。

平成 28 年度 第 41 回

# 九州地区教員研修会

期日 平成 28 年 10 月 14 日(金)・15 日(土)

会場 明 星 小 学 校

## 九州地区教員研修会を終えて

明星小学校

田 中 肇

換を目指して、取り組んでまいりました。

第四十一回九州地区教員研修会を十月十四日(金)、十五日(土)に本校明星小学校を会場に開催しました。

本校開催は二十八年ぶりということもあり、九州地区会長はじめ、周りの先生方のお力添えをいただきながら開催準備を進めてまいりました。

九州地区の研究テーマ「私学ならではの小学校教育の展開」を受けて、本校では、「主体的に課題を追求し、ともに学び合う子どもの育成」を主題として研究を進めてきました。知識伝達型授業から、子ども一人ひとりの考えから学びを出発させ、子どもの多様な考えの交流によって学びを生み出すという授業への転

ら約一五〇名の先生方が集まりました。開会式では、日本私立小学校連合会事務局長の清水良一先生から、ご挨拶を頂きました。その中で、九



第41回九州地区私立小学校教員研修会

九州地区教員研究会の創生期のお話や、研修会を通して教師一人一人が自ら育つことが大切であることをお話しして頂きました。また、九州地区会長の坂井睦先生からは、「私学ならではの教育活動」とは何か、「私学ならではの教員」とはどうあるべきかを二日間の研修会を大いに活用し、互いに学び合いましようとのお言葉を頂きました。両先生のお話を聴いて、「私学人」としての自覚も新たにしたところで、各教科の第一分科会が行われました。各分科会では、研究主題の教科としての解釈や授業について補助資料も加えてオリエンテーションが行われました。続いて懇親会が行われました。食事を共にする中で他校の先生方との交流を更に深めることができました。

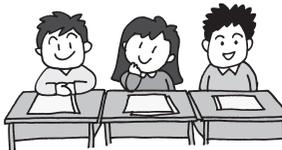
二日目は明星小学校で朝の活動である保護者による読み聞かせから参観して頂きました。引き続き、道徳も含めた十二の授業を見て頂き、続く第二分科会では、授業事実を元に活発な研究討議が行われました。本校で取り組んでいる「主体的に学び合う子どもの姿」について貴重な意見や助言を頂くことができました。今後の教育活動に活かし、更に研究

を進めていきたいと思っております。

午後からの第三分科会では、講師の先生の講話や持ち寄り資料の報告、実技研修などが行われました。

閉会式では、各部長先生から二日間の成果や課題などが報告されました。続いて九州地区副会長の中村和子先生から講評を頂き、最後に明星小学校の小畑善実校長が今回の研修会の参加についてのお礼を申し上げます、閉会となりました。

地区運営委員をはじめ理事会・指導員・教科部長・参加の先生方、そして講師の先生方の多大なるご支援ご協力により、研修会を無事に終了することができました。研修会運営にあたり支えて頂いた全ての方々に心からの感謝を申し上げます。有難うございました。



## 国語部会

自ら学ぶ力を育てる

国語科学習

森 俊輝（明治学園）

今秋、大分県別府市にある明星小学校で行われた九州地区教員研修会

の国語部会に参加しました。

研究授業では、研究テーマ「自ら学ぶ力を育てる国語科学習指導の研究」を受け、明星小学校の川原香里先生が三年生の物語文の授業をされました。単元名は「心の中のこたえとを、自分の言葉で表そう」。「モチモチの木」を題材にし、登場人物の気持ちをつまみ読むことをねらいとした授業でした。

本時では「豆太が医者様を呼びに行つたときの気持ちを考えよう。」というめあてをもち、豆太の行動が分かる言葉から豆太の気持ちについてクラス全体で話し合いをしました。「書きこみノート」を活用し、最初は隣同士ペアで意見を伝え合うことで、自分の意見と同じところや違うところを比べながら書きこみをしていました。児童は叙述にそって豆太の気持ちを想像し、豆太になりきって積極的に発言する姿が印象的でした。また、会話文「じさまあつ。」と「じさまっ。」の違いに着目し、「あ」があるのと



ないので気持ちにどのような違いがあるのかというように、豆太の気持ちにせまっていきました。今回、黒板には常に本文が掲示されていました。川原先生は本文を引用する意見が出ると、何度も繰り返し児童に音読するよう、声かけをされます。そこに、叙述を大切に扱いたいという先生の思いを感じる事ができました。授業の間、児童の意見に対して「よく考えたね。」「なるほどね。」と伝え、その言葉を受けて、児童もさらにやる気を出して話し合いを進めていきました。クラス全体が「モチモチの木」の世界に入り込み、自分の意見を堂々と言えるあたたかい雰囲気を感じました。研究討議では熱心に意見が交流され、授業教諭への質疑のみならず、語り手によって展開される物語文はどのようなことを意識して指導すべきか、改善授業提案も飛び出す熱気ある内容でした。

午後の部会では、講師の福岡教育大学附属福岡小学校内・深交会長長の松永登喜夫先生に指導助言をしていただきました。松永先生より物語文の指導法について、主語と述語からせまる読み取りや各場面のタイトルに着目して読みを深めていく方法などの教えをいただきました。全文を一文ずつに分けて並べ替えをする活動を通して、言葉に注目させること、また「完成した」という達成感を味わわせることが児童の主体性につながることも教えていただきました。その中でも松永先生が強調されていた「言葉には『音』と『意味』と『心』がある」というお話は、これから指導をしていく上で大切にしていきたいと思えます。

この研修会を通して、教師自身が学び手のお手本となれるよう、今日から学校・学級で私たち一人ひとりが努力していかなければということに改めて感じ、爽り多き二日間を過ごすことができました。

## 社会科部会

主体的に課題を追究し、  
学び合う社会科学学習を目指して

三浦 裕典（明星）

第四十一回九州地区教員研修会社会科部会では、明星小学校の佐藤智

子先生が「身近な社会事象に関心をもち、主体的に課題を追求し、学び合う社会科学学習を目指して。」を研究テーマに掲げ提案をされました。

佐藤先生の授業では、「これからの自動車の開発と関連企業。」の発展課題として「地元N石油では、どんな努力や工夫をして経営を発展させているのか。」について学ばせていただきました。ゲストティーチャー（西寛之さん）を招き、行っている取り組みや子どもたちが抱いた疑問について実際に話をしていただきました。話の中では、工夫していることを中心に、給油以外にどのようなサービスを行っている他社と差別化をはかっているのか、子どもたちにわかりやすく丁寧に説明してくださいました。工夫の中には、他社にはない取り組みをすること、人を育てることの大きく二つの内容でした。中でも、人を育てることについて特に熱心に話をしてくださいました。人を育てるとは、社長が社員・従業員とのつながりを

持つことであり、そうすることでより地域の人のつながりを持つことができるということでした。地域密着を行うことで顧客を増やすことができ、事業を拡大することにつながると教えていただきました。子どもたちは、話を聞く中で調べてもわからなかったこと、新たに生まれた疑問を西さんの話の後に質問をすることで、主体的に課題を持ち取り組むことができました。また、西さ



んの話聞くことで、心や姿勢を大事にすることも学ぶことができました。

その後の分科会Ⅱでは、子どもたち一人ひとりが学習課題を受け止めているかに主に論点が置かれ話し合いました。子どもたちの学習の見通しはできていたのか、「くをしていくからくに違いない。」という根拠を持つて全員が話を聴けるともって質問が出たのではないかなど意見が出されました。また、ゲストティーチャーを生かしていたかということや打ち合わせの重要性が指摘されました。打ち合わせの際、子どもたちの思いだけでなく、教師の思いも加えつなげるなど、ゲストティーチャーと子どもたちをつなぐ際の教員の重要性を学ぶことができました。

午後より、分科会Ⅲでは、効果的な授業の導入の仕方について各先生方の普段授業で行っていることを学ばせていただきました。子どもたちの興味・関心をひくために古地図を使い現在と昔を比べたり、デジタル教材の紹介などをしていただき、すぐにも使えるような導入を教えてくださいました。

九州地区教員研修会社会科部会では、多くの意見交換と、諸先輩の先生方のお言葉を聞き、とても参考になりました。授業の研究や多くの先生方の実践に基づく交流の場を設けていただき、授業の入り方の大切さを改めて考えさせていただきました。今回学んだことを学校で実践し、子どもたちの学びの力を引き出し、いけるように取り組んでいきたいと思えます。私にとって有意義な二日間となりました。

## 算数部会

自ら学ぶ

楽しい算数にするために

村井 親佳（福岡雙葉）

今年、大分の明星小学校にて、研修会が行われた。一日目の第一分科会では、田中肇先生より、四年「面積のはかり方と表し方」の授業についてのオリエンテーションがあった。

田中先生のクラスでは、算数の授

業において、単元の終わりに応用問題をとり組む「チャレンジ」の時間を設定されている。そのチャレンジの時間には、グループ活動で出た意見を自由に書き残すための「ナンデモシート（模造紙一枚）」が机上に広げられるということで、子どもたちの思考を残す手立てとして注目した。

本時では、「縦十センチメートル、横十六センチメートルの長方形の面

積を二等分する直線を見つけましょう。」という課題が提示された。長方形が描かれたプリントと、竹ひご、プリントをはさむためのクリアファイル、ホワイトボード用のペンが一人ひとりに配られ、竹ひごを使って見通しをたて、クリアファイルにその直線をペンで描いたり、その理由を書いたりしながら答えを求めていく。子どもたちは次々と自分の考えを書いていった。

グループ交流になると、ナンデモシートに自分の考えを書きながら説明をし、友達と考えを共有していった。様々な考えが出て、グループの交流は盛り上がった。

次はグループ間での交流だ。自グループの考えを他グループに伝えるべく役目と、聞きにきたグループに説明をする役目を分担し、他グループの意見から新たな視点を導くことができた。

得た意見をふまえ、自グループで意見を集約するところで時間となり、この後



に予定されていた全体交流はグループ活動が大いに盛り上がったため、次時のお楽しみとなった。

その後の第二分科会では、本時の授業の研究討議が行われた。

準備されたクリアファイルに、何度も考えを書いては消す児童が数人見られたため、プリントに残すという方法のほうがよかったのではないかと、またプリントの上部に図形が印刷されたものが配られたため、「折る「切る」という発想を導きにくくしてしまったこと、長方形の大きさは妥当だったのか、など多くの意見が出された。

また、「二等分」ということばが同じ形（合同な図形）を二つ作るという考えが子どもたちの思考の前提となつてしまい、折ったり切ったりしなかったために合同かを確かめることができなかつたこと、根拠の説明として既習事項を使うことができなかつたことなどが検討事項としてあがつた。

自由に意見を言い合えるクラスの雰囲気や楽しく算数の学習をしている子どもの姿に、田中先生の日頃の学級経営の素晴らしさを感じた授業であった。

第三分科会では、各校から実践を持ち寄り、共有した。各校の研究主題にそつた工夫がたくさん入つた実践を見せていただいた。教科書での学習だけでなく、児童が自主学習として取り組める問題コーナーを作るなどの意見も出された。

分科会では多くの意見が出され、とても充実した研修会となった。

## 理科部会

### 主体的に課題を追求し、 ともに学び合う理科の授業

松島真由美（敬愛）

理科部会では「おもしろい理科の授業をつくる」という研究テーマのもと、明星小学校の油布伸二先生が五年生の単元で、電磁石のコイルの中に鉄、銅、ステンレス、竹の4種類の芯を入れて、電磁石の強さを比べる授業を提供してくださいました。

この単元に入った時に子ども達は電磁石を利用したものは、洗濯機

や冷蔵庫など数多くあることを知り、電磁石に大変興味を持っていました。そこで、前時では、実際に自分たちで電磁石を作ってみました。コイルだけでは、磁力が強くないことから、「もっと強い電磁石をつくりたい。」「電磁石をもっと強くするにはどうすればよいか。」という意識が高まっていました。そこで、本時は「コイルの中に鉄や鉄以外の物を入れるとどうなるだろうか。」ということを実験で

確かめることにしました。

まず、先生は子どもたちと同じ形状の鉄、銅、ステンレス、竹の釘を見せ、「コイルの中に芯として入れたときに磁力が強い順に並べましょう。」と子どもたちに予想をたてる場を設定し、子どもたちの興味に揺さぶりをかけられました。

子ども達は、「鉄は磁石になるから一番強いのではないか。」とか「電流を流すものは電磁石を強くするのではないか。」など、きちんと根拠を持って予想をたてることができいました。

また、個人で予想をたてた後、班で話し合うことで、友達と共感したり、学びあつたりして、子どもたちの思考が動く場を設定されていました。

実験は、電磁石を強くする要因を調べるために、芯以外のものの条件は同じにして進められ、強さの比較を小さな鉄が電磁石に何個引き付けられるかを調べることで、電磁石の強さを比べることができるとは



ないかという計画をたて、自分たちの予想を検証する実験が行われまし  
た。第二分科会の研究討議では「両  
極に小さな釘をつけるのか一つの極  
のみにつけるのか」や「コイルの極  
についた釘の数を比べるのか、芯の  
部分についた釘の数を比べるのか。  
芯についた釘の数を数えるのでは、  
電磁石が芯を入れたために、強く  
なったのかどうかを調べることにし  
ならないのではないか。コイルにつ  
いた釘の数を調べるべきではなかつ  
たか。」など意見が出され、実験方  
法を統一しておけばよかつたのでは  
ないかという意見もありましたが、  
検証の方法を子どもたちに考えさせ  
ることも子どもたちの問題解決能力  
を図ることに繋がるように授業が設  
計されていたようでした。授業が進  
むにつれて、子どもたちがいきいき  
と目を輝かせて実験に取り組み、仲  
良く協力して実験を楽しんでいる様  
子をみると「主体的に課題を追求し、  
ともに学び合う子どもの育成」とい  
う明星小学校の主題や「おもしろい  
理科の授業をつくる」という理科部  
会の研究テーマを十分達成できた子  
どもの思考が動く授業であったと思  
います。

第三分科会では、各学校からの持  
ち寄り資料をもとにして、理科教師  
としての研修を深めることができま  
した。貴重な研修の場を与えてくだ  
さいました関係の皆様感謝いたし  
ます。

## 生活・総合部会

### 生きる力を育む

#### 生活科・総合とは？

与那覇ひかり(沖縄ミズイダノシヨウ)

現代の子どもたちの現状を踏ま  
え、知識や技能の習得だけでなく、  
自ら学ぶ力、つまり「生きる力」を、  
生活科・総合的学習でいかに育ん  
でいくかをテーマに、研修が進められ  
た。

#### 【授業研究】

明星小学校の元気いっばいの二年  
生を対象に、担任の古椎賢一先生に  
よる生活科の授業が行われた。単元  
名は、「あそび めいじん あつま  
れ」である。

児童は、これまでに学校付近で採

集した、どんぐりやまつぼっくりと  
いった自然物と、身の回りにあるも  
のを組み合わせ、おもちゃ作りを  
している。本時は、そのおもちゃを  
幼稚園児にも遊んで楽しんでもらう  
ために、工夫・改良する授業である。  
「もつとわくわくするためになん  
ぱりましょう。」という本時のめあ  
てをもとに、授業がスタートした。  
先生の「はじめ」の合図で、児童は  
素早く作業に取り掛かり、児童が主

体的に作業に取り組んでいる様子が  
伝わってきた。各々のグループにお  
店の名前が付いており、「カーレー  
ス店」「わいわいさかなつり」等、  
十種類のお店で賑わっていた。それ  
ぞれのグループが工夫を凝らしてお  
り、「しゅりけんまとあて」のグルー  
プ内では、「的が小さすぎると当て  
るのが難しいから、的を大きくしよ  
う。」など、幼稚園児がゲームを楽  
しめるように改良に励んでいた。

#### 【分科会Ⅱ 研究討議】

討議では、主に次の三点  
について話し合われた。一  
つ目は、めあての明確さで  
ある。授業中、児童の中に、  
自分で作ったおもちゃで遊  
びたい気持ちが強く、なか  
なか作業を進めないでいる  
子がいた。そこで、誰がわ  
くわくするのか、何をがん  
ばるのか、めあてを具体的  
に提示することで、低学年  
の児童でも目的に沿って活  
動できるのではないかと  
の意見が挙がった。

二つ目は、児童の作業時  
間の確保である。改善策と  
して、二コマ連続した授業



編成、導入部分の短縮、グループ編成の工夫が挙げられた。

三つ目は、安全面の確保である。

生活科の授業では、道具を活用した作業が多い。そこで、低学年の児童でも使用しやすいはさみやカッター、木の実の穴あけ器等、毎年使用するものであれば学校で購入してみてはという声があった。また、活動の場を教室から体育館に移す等、児童が安全に作業できるスペースの確保に関する示唆もあった。

【分科会Ⅲ 講師による講話】

「これからの生活科・総合的な学習のあり方」をテーマに、福岡教育大学教授の津川裕先生に講話をして頂いた。これからの生活科は、「教え込み」になってもいけないし、「活動あつて学びなし」になってもいけない。原点に戻り、生活科ができた経緯を理解することが重要である。単元づくりにあたっては、「具体的な活動や体験」を通して、生活上必要な習慣や技能が身につくようにすること。それが、生活科の究極の目標である「自立への基礎」を養うことになり、ひいては「生きる力」の育成に繋がるのであると教えて頂いた。

音楽部会

子どもが生き生きとする

音楽学習をめざして

長嶺 洋美（沖縄カトリック）

十月十四日（金）、十五日（土）の二日間、大分県の明星小学校で第四十一回九州地区教員研修会が行われました。

担任をしている一年一組の子どもたちと武野英美先生が「いいおとをみつけて よびかけっこをしてあそぼう」という題材で音楽づくりの授業をされました。

音楽室に入ってきた子どもたちは静かに自分の席に座り、はじまりの合図を待ちます。

授業は今月の歌「マイバラード」を歌うことから始まりました。響きのあるやわらかい声で美しく歌います。続いてリズムゲーム。武野先生が膝、肩、頭を自由に組み合わせさせて四拍のリズム打ちをし、それを子どもたちが見て真似をします。初めはゆっくり、動きも穏やかに。それが

徐々に速く動きも大きく。子どもたちは一心に先生に注目し、正確に真似ていきます。お見事！

リラクセスした子どもたちと今日の本題へ。まず今日使う楽器とリズムの確認。子どもたちは前時までにお気に入りの楽器と音色を決めているのです。今日は、その楽器を使ってお気に入りのリズム作り。

算数セットに入っているボードに四拍分の四角を印刷したりリズムプリントを貼り、「たん」「たた」「うん」「うん」を記号化したカードを置いていく。カードには磁石がついているため、容易に変更ができます。ルールは「たん」「たた」「うん」を必ず一度は使うこと。

先生の声で子どもたちは動き出します。すぐカードを置く子。少し考える子。なかなか一枚が置けない子。何度もやり直す子。どの子も真剣に向かい合っています。「出来たら自分リズム打ちしてみましょー」の声に、嬉しそうに活動する子どもたち。

続いてペアでの活動。作ったリズムをお互いに聴き合います。「お友達の良いところを聴き合おうね。」の言葉を聴いて、お気に入りの楽器を手にお互いに発表。一通り終わると、「リズムを変えてみよう。」といろいろなパターンを作っていました。リズムが新しくなるたびにリズムを打ち、途中「このリズムはなんかいやだな」とか「うん」はこ



にしよう」などと呟きながらお互いに発表し聴き合い、更にお気に入りの決めていきました。楽しそうな表情にとっても嬉しく感じました。

最後は全体に発表。全員に見えるように拡大した「ミドレ・」とリズムを入れる四拍分の四角が黒板に貼られ、リズムをあてはめていきます。作った子のリズム打ちに続き、全員が真似る。確認した後、武野先生のピアノ「ミドレ・」に続きリズムを

打っていく。みんな上手にお気に入りの楽器でお友達の作ったリズムを打っていました。数名の発表で時間になり授業終了。みんなの発表を聴きたいと思いました。

授業は終始穏やかな雰囲気です。進んでいきました。普段から「聴く」ことを大切に過ごしていることがよくわかりました。

第三分科会では合唱・歌唱指導で感じている事、先生方に尋ねたいことを分かち合い、各校で歌っている合唱曲をみんなで歌いました。

学びの多い二日間でした。ありがとうございました。

## 図画工作部会

つくり出す喜びを味わい、ともに学び合い高め合う図画工作学習

森 妙子（敬愛）

平成二十八年十月十四（金）、十五（土）日に、大分明星小学校で九州地区教員研修会が行われました。明星小学校は「誠実な心、たゆまぬ努力」を校訓とされており、二十八年ぶりの日私小連開催校でした。今年、「主体的に課題を追求し、ともに学び合う子どもの育成」を研究テーマに掲げ、「聴く」ことを重視した教育に取り組みされていきました。図画工作科部会では「つくり出す喜びを味わい、ともに学び合い高め合う図画工作学習」というテーマで、一年生の岡崎砂織先生に造形遊びの授業「いろいろいろいろパラダイス」をして頂きました。この授業は、色水を使った造形遊びの授業です。赤・黄・緑の食紅を水に溶かして様々な色水をつくってそれを透明の容器に入れ、置いたり、重ねたり、

並べたりすることによって色水の濃淡の美しさや透過性を楽しむことをねらいとして行われました。造形遊びは活動においても評価においても難しく、岡崎先生は今まで色々な造形遊びの授業を研究し、取り組んでこられました。体育館や図工室を使った新聞紙遊びや地元の名産である竹を使った造形遊びなど、色々な場所や材料で試された結果、色水を使った屋外での造形遊びに決まりま

した。当日は三百本のペットボトルと六百個のプリンカップ、緑日で金魚を入れるための袋など、多くの容器と衣装ケースに入った大量の水が用意されました。子ども達は食紅を少しずつ溶かし入れ、赤・黄・緑の鮮やかな色水を作ります。途中で他の食紅を入れることで色が変わることに気がついた子ども達は、色々な色を混ぜて作ってはペットボトルに詰めて並べていきました。机上に商



品のように並べたり、壁にかけたフックにビニール袋をかけて透け具合を楽しんだり、色合いを考えながらペットボトルをブロックの上に配置したりして、色々な活動を行いました。青空の下、美しく輝く色水に子ども達は大いに喜び、大盛り上がりでの研究授業となりました。

授業後の研究討議では、子どもたちが色を並べる活動よりも色水を作る活動に集中していた事や、子どもたちに活動を明確にさせるためには、「どのようなあてやてだてならより良く

なっただか」といった議論が交わされました。特に授業者の先生が課題とされていたのは、活動中の児童への声かけです。子どもの活動をささげずに、ねらった活動に導くための方法についても話し合いました。

最後に講師の木村先生から「子どもの活動は、楽しむ、思いつく、工夫する、気がつく。この四つが大切」という話を頂き、活動後の振り返りに学びがあるという話を頂きました。二日目の午後からは大分県立美術館に移動し、OPAMの学芸指導主事である木村典之先生に、館のコンセプトや研究内容についてお話を伺いました。とても有意義な二日間となりました。

# 保健体育部会

## マット運動「跳び前転」の

### 授業実践報告

林 里香 (福岡雙葉)

保健体育部会では、今年度も「わかる、できる、楽しい体育の授業」

をテーマに研修を行いました。

今回は、明星小学校の田中邦俊先生が、六年生の「マット運動（跳び前転）」の授業を提案してくださいました。

第一分科会では、保健体育部会の研究テーマをより深め、「なぜできたのか。どうしてできたのか。」と思考する場面を展開することがねらいとして、授業者より提案がありました。そして、「跳び前転」を指導するにあたり、用具の工夫としてGボールを使って体幹トレーニングを取り入れるなどの説明がありました。

授業では、Gボールを使って簡単なトレーニングから始めました。ここでは、六年生が意欲的に楽しみながら取り組む姿が見られました。展開部分では、大きく回るイメージを持たせる為に、Gボールでの前転を行いました。また、動画を見せたり、跳ぶという意識付けをするために目印シートを使用したりするなど、田中先生のイメージを持たせるための場の工夫が随所に見られる授業となりました。

第二分科会では、授業者の田中先生より、自評がありました。Gボ

ールを使用した活動は子供たちが楽しく取り組む事ができていた。さらに使い方の指導を深めたい。しかし、Gボールでの前転ではうまく回れない児童がいたため、Gボールの空気を抜く、サイズを変えたバリエーションの準備が必要だった。また、安全面の指導や、演技を見合う場面の指導不足を感じた。などの話がありました。研究討議では、体育の授業の導入部分で、Gボールの体幹トレーニングを取り入れたことは大変素晴らしい。今後、継続的に指導していく事は教育的価値が高いといった意見が出されました。しかし、前転、跳び前転の前段階としてGボールを用いると、回転する際に頭部がマットに当たりスピードが落ちるため、横倒しのような格好になり安全とは言えない。

また、Gボールを抱えるため床に手を付けないことから、回転系の練習にはなりにくいとの指摘がありました。今後の課題として、児童がアクティブラーニング

に慣れていないため、司会や話し合いの仕方、見合う場面の視点をしっかりとさせた授業作りが必要と話し合われました。指導員の名切先生より、今回の授業について「楽しさや喜びに触れ、技を習得するための運動の行い方や場を工夫しているか」という事が話されました。中でも、マット運動のルール作りを徹底して安全



面を高めた授業作りが必要といったご指導がありました。そして、「動

く楽しさ」、「伸びる楽しさ」、「集う楽しさ」、「わかる楽しさ」をこれからも追及した授業作りを目指していきましようとの話しがありました。

第三分科会では、明星小学校の田中邦俊先生よりGボールの実技研修が行われました。実際に児童が授業で取り組んだ事を実技講習した事でより深く理解する事ができました。

今回、授業をして頂いた田中先生、提案有難うございました。

# 英語部会

よく聴き、

ともに学び合った研修会

竹中 絵美 (長崎精道)

英語部会では「コミュニケーション能力を高める授業の工夫」知識を技能にまで高めることができる子どもを目指して」という研究テーマのもと、明星小学校の中東洋二先生と野中洋克先生がチームティーチ

ングの授業を展開してくださいました。Who's hel/serを用いた「家

族の紹介」にチャレンジした二年生の元気な子どもたち。「家族」という時として配慮の必要なテーマを取り扱う上で、先生方の温かな心遣いが指導の中に生きており、子どもたちも安心してのびのびと活動に取り組んでいました。子どもたちは教師

の狙い通り、Le/she の違いに気づき、導入された言語知識を自分の言

葉として使おうという意識が高まったようでした。基本文を更に定着させ、実際に自分の家族を紹介することができるとい点において、知識を技能にまで高めるためには、次時以降の活動の積み重ねやペアワークの更なる工夫が期待されるところで

す。



第三分科会では、三々四

人の小グループに分かれての指導案作りに挑戦しました。初の試みでしたが、終了時刻を大幅に超過するほど白熱し、互いの指導経験を活かしながら、学びを深めることができました。テーマを「名詞の単数形・複数形、可算名詞・不可算名詞を、どのように子どもたちに指導するか」と定め、自由に四十五分間授業の指導案を作りました。初めは、どのグループも方向性が定まらず手探り状態でしたが、互いの意見をよく聴き、一つの狙いに向かって意見をまとめるという作

業を繰り返すことで、各グループの中に、ともに学び合う雰囲気が生ま

れました。どのグループにも共通していたことは、「それぞれの名詞をカテゴリ別に整理させることで、日本語を介さずに子どもたちに気づかせる」というポイントでした。一つの授業を考える中でも、様々な視点からの指導方法を共有することができ、貴重なお土産を持ち帰ることができました。一つの目標に向かつてグループ内で共働するという経験は、楽しいという気持ちや大きな達成感を与えてくれました。今回のグループでの指導案作りを通して感じた「学び合いの大切さ」や、「互いを受け入れることで生まれる温かな雰囲気」を、子どもたちにも感じてほしい、そのための授業作りをこれからも工夫していきたいと思いた。 「よく聴き、ともに学び合う」ためには、仲間の存在が不可欠です。研修という貴重な学びの機会を与えて頂いたこと、目標を同じくする先生方との出会いに心より感謝申し上げます。

## 学校紹介

国際社会を視野に英語力や「聴く力」を高める

学校法人別府大学 明星小学校

校長 小 畑 善 実

別府市の明星小は、静かで落ち着いた  
きのある学校づくりに取り組んでいる。  
子どもたちの「聴く力」を伸ばす  
取り組みを続けている。

「教室で誰かが発言したら最後まで  
きちんと聴くことを徹底していま  
す。ただ単に『聴く』のではなく、  
耳を傾けて音や声、人の話を丁寧に  
『聴く』ことを重視します。」

聴き上手な教師のもとでは聴き上  
手な子どもが育つと考えている。

本校は昭和二十二年に開校。半世  
紀にわたりカリキュラムの教えを教育  
理念に掲げた人間教育に力を注いで  
きた。

平成十年に学校法人別府大学に移

管され、ミッション系のイメージは  
薄らいできたが、今も生活指導や心  
の教育の面で創立からの精神を受け  
継いでいる。

県内唯一の私立小学校として独自  
の教育を追求し、知育・徳育・体育  
の調和のとれた、国際社会に通用す  
る人間教育を目指している。

勤勉さと継続する力をもって「た  
ゆまぬ努力」のできる人材を育成。  
同じキャンパス内に併設されている  
明星幼稚園・明豊中学校との連携  
を深め、交流を図っている。平成  
二十八年度四月の児童数は三二二  
人。全年年二学級ずつの計十二学級  
になっている。

授業時間は学習指導要領に示さ  
れた時間数より週二時間多い。さら  
に第一・二土曜日は「活動の日」と  
して登校し、体験活動に励んでいる。

放課後には週三回、個別指導を中  
心とした「パワーアップ学習」を行  
い、一人ひとりの実態に応じた学力  
向上を目指している。この学習は、  
夏・冬の休暇中にも計十一日間行わ  
れる。さらにカリキュラムの異なる  
他校からの転入生などには、放課後  
に個別で「フォロワーアップ学習」の  
時間を設けている。

学力向上への取り組みは着実に成  
果を挙げ、全国学力・学習状況調査  
では、例年、全県・全国レベルを上  
回る成績を残している。

卒業生の進路は、系列の明豊中を  
中心に、県内外の難関中、公立中に  
分かれる。個性や能力に応じて進路  
を選択する。今春の卒業生は、県内  
では大分大附属中、向陽中、  
岩田中など、県外では難中、  
ラサール中、開成中、早稲  
田佐賀中、久留米大附設中、  
西南学院中、筑紫女学園中  
といった難関校の合格者を  
出している。教育活動では、  
英語教育には伝統的に力を  
注いできた。一年から週二  
時間、六年間のカリキュラ  
ムに沿って正規の英語授業  
を行い「生きた英語力」を  
身につける。

また、日常の学習は、も  
ちろん国語（言語）の力を  
伸ばすことにも重点を置いて  
いる。

あわせて、理科・算数の  
理系科目の学習内容のレベ  
ルアップを図るほか、音楽  
や図工などアートの教育に

も力を入れている。

校舎は全室冷暖房完備。耐震やセ  
キュリティを整え、安全な学校生活  
を守る。校内では、チャイムなしの  
生活で自主性を育てている。  
『保護者の会』による学校支援活  
動も盛んで、人権教育充実の「ほつ  
とハートデー」は恒例行事の一つ。



平成 29 年度  
日私小連研修会日程表

(平成 28 年 11 月 25 日現在)

研修会	実施回数	集録番号	期 日	場 所
西日本地区	59	401	平成 29 年 5 月 26 日 (金)	はつしば学園小学校 (大阪府)
東京地区	54	402	平成 29 年 6 月 2 日 (金)	玉川学園小学部 (東京都)
全国教頭	41	403	平成 29 年 8 月 2 日・3 日 (水・木)	神戸メリケンパークオリエンタル ホテル (兵庫県)
全国夏季	61	404	平成 29 年 8 月 3 日～5 日 (木～土)	神戸ポートピアホテル、他 (兵庫県)
北海道・ 東北地区	46	405	平成 29 年 10 月 13 日 (金)	郡山ザベリオ学園小学校 (福島県)
九州地区	42	406	平成 29 年 10 月 20 日・21 日 (金・土)	福岡海星女子学院附属小学校 (福岡県)
関東地区	59	407	平成 29 年 11 月 11 日 (土)	桐蔭学園小学部 (神奈川県)
全国幹部	62	408	平成 29 年 12 月 7 日～9 日 (木～土)	ANA クラウンプラザホテル広島 (広島県)

日本私学教育研究所と共催の初任者等研修会

研 修 会	期 日	場 所
初任者研修地区研修会		
小学校 (東日本地区)	平成 29 年 7 月 26 日～28 日 (水～金)	アルカディア市ヶ谷 (東京都)
小学校 (西日本地区)	平成 29 年 7 月 26 日～28 日 (水～金)	大阪ガーデンパレス (大阪府)
初任者研修全国研修会		
小中高校 (東日本)	平成 29 年 10 月 13 日～14 日 (金～土)	主婦会館プラザエフ (東京都)
小中高校 (西日本)	平成 29 年 10 月 27 日～28 日 (金～土)	大阪私学会館 (大阪府)
中堅教員 (10 年経験者等) 研修会		
小中高校 (東日本)	平成 29 年 7 月 26 日～27 日 (水～木)	主婦会館プラザエフ (東京都)
小中高校 (西日本)	平成 29 年 8 月 2 日～3 日 (水～木)	大阪私学会館 (大阪府)

東日本地区は (東京地区と北海道・東北地区と関東地区)、西日本地区は (西日本地区と九州地区) を含む。

## 2010 年代の教育宣言

今や、地球規模で激動する 2010 年代を迎えました。私たち私立小学校は、著しい社会変化と科学技術の高度化が進展する時代の中で、建学の精神を継承するとともに伝統を重んじ、その使命とする理想の教育をめざし、誇りをもって初等教育の先駆的な実践を世に問うてきました。

21 世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。その一方で「心」の時代でもあります。私たち私立小学校は、個人の自由と人権および児童一人一人の個性を尊び、その内なる可能性を児童愛をもって引き出す方法を実践・探究し、未来を切り拓いていく基礎的資質と心豊かな人間性を育成します。

併せて、真の世界平和と持続可能な自然環境の維持のために、広い視野をもって考え、共感する力を身につけた児童を育成します。

そのため、私たち私立小学校は、伝統と特色ある教育をさらに充実させ、私学人としての自覚に立ち、お互いに協力結束し磨き合い、わが国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2010 (平成 22) 年 6 月 11 日

日本私立小学校連合会